

マリアは右手に鋏を持つ

叶野遥



【登場人物表】

高垣里美（36）教師

高垣真守（10）里美の子

久納怜人（16）不登校男子

森口航太郎（35）里美の同僚

鈴掛晴子（25）里美の同僚

権藤進（45）学年主任

田代哲也（10）真守の親友

深山英輔（16）里美の生徒

松井康太（16）里美の生徒

岡倉徹（16）里美の生徒

赤井雅之（16）里美の生徒

田畑悠馬（16）里美の生徒

神崎美歩（16）里美の生徒

橋本玲花（16）里美の生徒

久納薫（46）久納の母親

医師

三浦良一（33）真守の担任

戸田校長（55）真守の学校の校長

高田純也（10）真守のクラスメイト

児童 B  
児童 A  
クラスメイト C (ロ) 真守のクラスメイト  
クラスメイト B (ロ) 真守のクラスメイト  
クラスメイト A (ロ) 真守のクラスメイト

○私立吾妻高校・全景

盛り上がっている生徒たちの声。

○同・2年5組前廊下

2年5組の札。

生徒たちの声が廊下に響いている。

里美の声「ホームルーム始めるよー」

○同・2年5組教室

生徒たちが各々盛り上がっている。

高垣里美(36)が黒板に書いている。

「体育祭リレー出場者・4名選出」と

書き終え教壇から振り返って生徒を見

回す。

里美「今日は今度の体育祭、クラス対抗リレ

ーの走者を決めてほしいの。委員長、よろ

しくねー

深山英輔(17)と神崎美歩(17)が席を立

ち教壇へ上がる。

里美、教壇を下りて教室の入口付近へ

移動する。

深山「やるからには当然一位を目指すぞ」

一斉にあがる歓声。

赤井雅之(16)、田畑悠馬(16)、橋本玲

花(16)が大声で盛り上がる。

赤井「やっぱ優勝勝ち取ってこそだよな」

玲花「先生、優勝したら賞品とかないの？」

里美「なんと立派なトロフィーと賞状がもら

えます！」

田畑「普通じゃんか」

一同、笑う。

深山「でも負けるのなんて悔しいだろ。俺た

ちで優勝かつさらってやろうぜ」

美歩「それじゃ男女二人ずつ、誰か立候補か

推薦はいませんか」

松井康太(16)が手を挙げる。

松井「はいはい！俺走りたいっす」

一斉にあがる歓声と拍手。

赤井「いいぞ松ちゃん！」

岡倉「俺も俺も！」

玲花 「えー岡倉あんた足早いの？」

岡倉 「これでも記録持ちだぜ」

玲花 「え、意外」

赤井 が手を挙げる。

赤井 「俺も走りたい！」

次々に手を挙げる男子生徒たち。

口々に俺が俺がと主張する。

美歩 「ちよつとちよつと：深山くん」

困惑した表情で深山を見る美歩。

深山 「俺も走りたくなってきた」

美歩 「えー。これじゃ決まらないよ」

深山 「じゃんけんで決めるか？」

美歩 「それじゃ適當すぎない？」

里美、にぎやかな生徒たちを嬉しそう

に眺めている。

教室の真ん中に誰も座っていない席が

ある。

○ 同・職員室（夕）

里美、自席でパソコンで数学のテスト

を作成している。

森口航太郎(30)が入ってくる。

森口、里美の隣の席に来て里美のパソコンを覗き込む。

里美、気付いていない。

森口「テストですか」

里美「わっ！びっくりした：森口先生」

森口、パソコンを注視する。

森口「先生、ちよつと前にもこのテスト作っ

てませんでした？」

里美「いえ、これは別の生徒用なんです」

森口「別のって？」

里美の向かいの席から鈴掛晴子(25)が話しかけてくる。

晴子「高垣先生、生徒ごとに小テストの問題を変えてるんだそうですね」

森口「一人ひとり？クラス全員分ですか」

里美「ええ、全員理解度が違いますから」

森口「そりゃそうですね：それって大変じゃないですか」



森口と晴子、目を合わせて頷く。

里美「確かに大変ですけど、これも生徒の為  
ですから」

晴子「かつこいいい：」

森口「教師の鑑ですね」

里美、恥ずかしそうに笑う。

里美「そんな立派じゃないですよ」

晴子「謙遜しないでくださいよ」

里美「私なんて旦那にも逃げられるようなた

だの仕事バカなんで、鑑なんかじゃないで  
すホント」

森口「いや、僕はその元旦那さんに見る目が  
ないだけだと思いますけどね」

晴子「右に同じです」

里美「（苦笑）ありがとうございます」

チャイムが鳴る。

壁の時計は5時を過ぎている。

晴子、時計を見て立ち上がる。

晴子「あ、ヤバ」

晴子が権藤進（45）の席へ行って頭を下

げる。

晴子「すみません、息子のお迎えがあるので  
お先に失礼します」

権藤「おお、お疲れさん」

晴子「お疲れ様です」

晴子、里美と森口に一礼して足早に職員室を出ていく。

森口、パソコンを開きながら

森口「鈴掛先生も忙しそうですね。お母さ

んは大変だ」

里美、パソコンを閉じるとクラス出欠表を取り出して開く。

名前を順に指でなぞり、久納怜人（こ）の名前で止める。出欠表は最初の一か月以外ずっと欠席。

権藤「高垣先生はいいんですか、帰らなくて。

お子さん待ってるでしょ」

里美、我に返って振り返る。

里美「え？あ、大丈夫です」

森口「あれ、先生お子さんいたんですか」

里美「はい。「〇歳の息子が一人」

森口「そうだったんだ。ちよつと残念」

里美「え？」

森口「なんでもないです。でも先生、息子さ

ん家に一人ですよね。心配じゃないです

か？早く帰ってあげた方が」

里美「あの子はしつかりしてるんで、私が遅

くても大丈夫なんです」

森口「そんなもんですか？？」

里美、時計を見る。

ちよつと考えてから鞆にクラス名簿を

突っ込むと立ち上がり権藤の席へ行く。

里美「すみません、やっぱり帰りますね」

権藤「はいはい、お疲れ様」

里美、一礼して足早に出ていく。

森口、里美に手を振って見送り仕事に

戻る。

○古いアパート（里美の家）・全景（夕）

小さなアパート。

○里美の家の前

表札に「高垣」と書いてある。

○里美の家・リビング（夕）

高垣真守（ヒロ）がテレビを点けたまま宿題の漢字の書き取りをやっている。横にはランドセルが乱暴に置いてある。中から「死ね」「クズ」等の落書きだらけのノートが数冊見える。壁の時計を見る。午後7時。真守、溜息をつき書き取りに戻る。

○久納の家・全景（夜）

自転車に乗った里美がやってくる。正面に自転車を停め家を見上げる。二階の一室に灯りがともっている。

○同・玄関（夜）

薄暗い中チャイムが鳴っている。

電気が点いて久納薫（ヤウ）がやってくる。

薫 「はいはい：お待ちくださいね」

ドアを開けると里美が立っている。

里美 「どうもこんばんは」

薫 「あら、先生：」

里美、笑顔を作り鞆からプリントと手

紙を差し出す。

里美 「あの、今日はお知らせをお持ちしたんです。体育祭の」

薫、受け取るが表情は暗い。

薫 「先生、毎回来ていただいて申し訳ありま

せんが怜人はまだ」

里美 「いいんです、無理に会おうとか、連れて行こうとかするつもりはありませんので！ただ、知っておいてほしいなっと思って」

○同・久納の部屋（夜）

里美の声 「寂しいじゃないですか、知らないうちに行事が終わっちゃったら」

ベッドに横になり雑誌を広げている久納、チラチラとドアを見る。立ち上がり、机の上のカレンダーに近づく。里美の声「来月の第一日曜なんです。皆もすぐ張り切ってるんですよ」

薫の声「はあ……」

久納、カレンダーの日曜をなぞる。すぐにカレンダーを放ってベッドに戻る。枕を頭に押し付けて耳を塞ぐ。

○同・玄関（夜）

里美、靴を持ち直して薫に笑顔を見せる。

里美「今日はこれで失礼致しますね。もし怜人くんが興味を持ってくれたら、一分でも来てくれたら嬉しいですよ」

里美、二階の久納の部屋に向けて

里美「またね、久納くん！今度は顔見せて

ね！」

久納の部屋は静かなまま。

里美、薫に会釈する。

里美「それでは失礼します」

薫「あ、はい：」

里美、家を出ていく。

○同・玄関前（夜）

里美が出てくる。

振り返り、二階を見上げる。

窓の向こうに人影が揺れている。

里美、満足げに微笑む。

里美「よし」

里美、自転車に乗って走り出す。

○里美の家・全景（夜）

○同・リビング（夜）

書き取りを終えたノートがテーブルの

上に広げっぱなし。

携帯ゲームをやっている真守、玄関の

方からドアを開ける音がして顔を上げる。

里美の声「ただいまー」

真守「おかえり！」

真守、立ち上がり部屋を出ていく。

○同・玄関（夕）

里美、食材がいっぱい詰まったエコバッグを置くと上着を脱いでハンガーにかけ靴を脱ぐ。

真守、里美に駆け寄る。

真守「お帰りお母さん」

里美「ただいま。遅くなっちゃってごめんね、  
今ご飯用意するね」

里美、真守の頭を撫でると部屋に入っていく。

真守、後をついていく。

玄関には里美のキレイなパンプスと、  
真守の泥だらけのスニーカーが並んでいる。



○久納の家・久納の部屋（夜）

久納、ベッドの上に座って窓の外を眺めて  
ている。

満月の光が室内を照らしている。

久納の手には里美が書いた手紙（便箋  
2枚）。

久納、満月を見つめ、ゆっくりとベッ  
ドから立ち上がる。

○私立吾妻高校・2年5組前廊下（朝）

美歩が里美の手を引いて走ってくる。

里美「ちよつと神崎さんどうしたの？」

美歩「入って入って！」

美歩、里美を教室に押し込む。

○同・2年5組教室（朝）

美歩に押された里美、教室に入って周  
囲を見回す。

里美「もう、何？」

久納の席を遠巻きに見ていた生徒たち、  
里美を振り返る。  
席に座って縮こまっている久納、顔を  
上げて里美を見る。

里美、驚いて固まる。

久納「あ、先生：」

里美、笑顔。

久納の席まで行く。

里美「おはよう、久納くん」

久納、笑顔を見せて

久納「おはようございます」

生徒たちも安堵した様子。

○同・全景

チャイムが鳴る。

○同・2年5組教室内

教科書を片付ける生徒たち。

里美、黒板を消している。

久納「先生」

里美が振り返ると久納がいる。

○同・中庭

遊んでいる生徒、談笑している生徒等、  
各々が楽しそうに過ごしている。

ベンチに並んで座っている里美と久納。

里美「どう？久しぶりの授業は。付いていけ  
た？」

久納「なんとか：。一応、自習はするように  
してたから」

里美「えらいね、君は」

久納、首を横に振る。

久納「怖いだけです。周りに置いてかれるの  
が。せめて勉強だけでもって」

里美「そんな自分を理解して努力してるって  
だけで、じゅうぶんすごいよ」

久納、視線を逸らしたまま笑う。

久納「：本当は、学校に来るのもまだ怖いん  
だけ。でも、先生が護ってくれてるって言  
ったから」

里美「え？：ああ、手紙のことね」

久納「うん、先生がいてくれるなら頑張れる  
って思った」

久納、胸ポケットから小さく畳んだ里  
美からの手紙を見せる。

里美「そっか：そっか」

里美、満足げにうなづく。

里美「久納くん。私はあなたの味方だからね。

いつでも護ってあげるからね」

久納「うん。先生」

里美と久納、微笑みあう。

### ○同・職員室

権藤が笑顔で入ってくる。

権藤「高垣先生、聞きましたよ。不登校の生  
徒が登校してくれたそうですね」

里美「はい、そうなんです。5月ぶりに」

権藤「いやあ素晴らしい。久納くんといえば  
やたら繊細で難しい子だったのに一体どん  
な魔法を使ったんです？」

里美「特別なことは何も。ただ、何回も何回も家に通って、手紙で気持ちを伝えたただけです」

権藤「生徒一人のためにそこまで時間をかける：実に素晴らしい。(周囲を見て)皆も高垣先生に拍手！」

権藤が促して拍手が起こる。  
晴子、森口が拍手している。

里美、照れ臭そうに笑う。

### ○里美の家・全景(夜)

鼻歌を歌いながら里美が帰ってくる。  
自転車かごには食材が詰まったエコバッグ。  
ッグ。

### ○同・台所

里美、台所に入りエコバッグを作業スペースに置く。

真守、顔を出す。

真守「お母さんおかえり！」

里美「ただいま。今ご飯作るね」

真守「もうご飯炊いてあるし、みそ汁も作っ  
たよ！」

炊飯器は保温状態、ガスコンロには片  
手鍋が乗っている。

里美「あらほんと。すごいじゃない真守！あ  
りがとうね」

真守、照れ臭そうに笑う。

真守「それでねお母さん、今度の運動会なん  
だけど」

里美「じゃあ真守、お母さんおかず作っちゃ  
うから。お部屋片づけてきてね。お話はご

飯の時に聞くわ」

真守「あ：うん、わかった」

真守、プリントを握り締めると寂しそ  
うに台所を出ていく。

○同・リビング（夜）

テーブルの上にご飯とみそ汁、豚の生  
姜焼きとサラダが並んでいる。

里美と真守が食事をしている。

真守、テレビを気にしながら食事。

里美「真守、テレビばかり見ないの。こぼしてるよ」

真守「あ、はい」

真守、服に着いたご飯粒を取って食べる。

里美「で、さっき何言おうとしたの？」

真守「運動会！お知らせもらった」

里美「へえ。いついつ？」

里美、手を差し出す。真守、立ち上がってプリントを手渡しながら

真守「来月の最初の日曜。ぼくね、リレーに出るんだよ」

里美、プリントを見て眉を顰める。

里美「え、待って来月の第一日曜？」

スマホを取り出して操作して

里美「あー！：ウチの高校も同じ日に体育祭だ」

真守「え」

里美「ごめんね、お母さん仕事だから行けな  
いわ」

真守「：そう」

真守、ゆっくりと腰を下ろす。

里美「ごめんね、真守」

真守、笑顔を見せて

真守「ううん、お仕事だから仕方ないね」

里美も笑顔を見せて真守の頭を撫でる。

里美「いい子ね」

真守「：うん」

頭を撫でられながら下を向く真守。

表情は見えない。

里美「じゃあさ、お詫びに明日。夜ごはんど

こか食べに行こうか」

真守、顔を上げる。

真守「いいの？」

里美「うん。明日は会議もないし、多分早く

帰ってこれると思うよ」

真守「しようがないな、行ってあげるよ」

真守、笑顔で小指を差し出す。



里美、そつと小指を絡める。

里美・真守「ゆーびきーりげんまん！」

里美と真守が歌っている。

ソファにある真守のランドセルは泥を拭いた跡が残っている。傍には泥を拭いた汚れたタオルが丸まっている。

○私立吾妻高校・正門前

放課後のチャイムが鳴る。

生徒たちが帰っていく。

○同・職員室

まだ仕事をしている教員が多い。

里美、机の上をまとめている。

森口が後ろを通りかかる。

森口「上がりですか」

里美「あ、はい。この教材を資料室に返したらそのまま帰ろうかと」

森口「先生にしては珍しい。何か用事？」

里美「ええ、まあ。息子と食事にも」

森口「それはいいですね。楽しんで」

里美「はい、ありがとうございます」

里美、会釈すると教材と鞆を抱えて職員室を出ていく。

森口、笑顔で見送る。

○同・資料室

里美、資料室のドアを開け放して片付けている。

久納が入ってくる。

久納「先生」

里美「あらどうしたの、もう下校時間よ」

久納、悲し気に目を伏せ拳を握る。

里美、不思議そうに久納を見る。

里美「久納くん：？」

久納「先生：僕の話、聞いてくれますか」

里美、言葉に詰まり、壁掛け時計を見上げる。

時計は午後4時を回っている。

里美「ごめんね久納くん。今日はもう：」

久納「僕の話、聞いてくれないんですか。」

久納、ドアを思い切り叩く。

里美、大きな音に一瞬怯む。

久納と時計を見て逡巡する里美。

久納「先生」

久納が無表情に里美を見る。

里美、慌てて振り返り笑顔を作る。

里美「わかったわ、話を聞く。職員室でいい？」

里美、久納に資料室から出るように促

す。

里美と久納、資料室を出ていく。

壁掛け時計の秒針がチクタクと音を立

てて動いている。

○同・正門前（夕）

チャイムが鳴っている。

大時計が午後6時を指している。

里美、駆け足で出てくる。

腕時計をチラチラと見ながら全速力で

走って正門を出ていく。

○ 里美の家・リビング（夕）

薄暗い室内。照明もテレビも点いていない。

壁の時計は午後7時を指している。

真守、ソファに丸まって寝転がっている。

顔は見えないが、背中には靴の跡が着いているのが見える。

ランドセルは泥だらけのまま。

○ 同・家の前（夕）

自転車をこいで里美が帰ってくる。

息を切らしながら自転車を止め、玄関のドアを開ける。

里美「ただいまー！」

○ 同・リビング（夕）

真守、里美の声に飛び起き、ランドセルをソファの陰に押し込み背中を隠す

姿勢で寝たふりをする。

里美「ごめんね結局遅くなっちゃって…」

里美が入ってきて電気を点ける。

里美「真守、いるの？」

ソファの真守を見つけて苦笑する。

里美「こんなところで昼寝しちゃって」

真守、今起きたように演じる。

真守「あ、おかえり」

里美「ただいま。ごめんね遅くなっちゃった。

今からお店行ったら遅くなるね」

真守「いいよ、別に期待してなかったし」

里美「あらクールな言い方」

真守「お仕事でしょ？仕方ないよ」

里美「うん：ごめんね」

里美、真守の頭を撫でようと手を伸ばす。

真守、サッと立ち上がりランドセルを抱えて早足で部屋を出ていく。

真守「トイレ」

里美「あ、うん。夕飯、用意するね」

里美、立ち上がる。

○同・全景（夜）

月が上がっている。

○同・浴室（夜）

真つ暗な浴室に佇んでいる真守。

右手にはカッターナイフ。

真守、呼吸を荒くしながらゆっくりと

目を閉じる。

暗い浴室に水滴が落ちる音が響く。

○同・台所（夜）

里美、夕飯を作っている。

時計を見る。午後7時 $\infty$ 分を過ぎてい

る。

里美「まだトイレにいるのかしら」

里美、火を止め台所を出て行く。

里美「真守ー？お腹でも痛いのかしら」

○同・浴室（夜）

暗い室内。

真守が倒れている。

里美の声「真守ー？どこ？」

真守の反応はない。

○同・脱衣所前（夜）

里美、一度通り過ぎたが戻ってくる。

部屋を覗き込み

里美「真守、いる？」

返事はない。

里美、脱衣所に入る。

○同・脱衣所（夜）

里美、浴室の扉の前に立つ。

里美「真守？」

返事はない。

里美、しばらく考えて浴室の電気を点けて反応を見る。

反応はない。

里美「真守、いないよね？開けるよ？」  
里美、そっと浴室のドアを開ける。

○同・浴室（夜）

床が血だまりになっている。  
血だまりの中心、タオルを噛み、右手  
に血まみれのカッターを持ち左手首か  
ら血を流した状態で真守が倒れている。  
里美、茫然とその様子を見つめる。  
不意に膝から崩れ落ちる里美。  
里美「真守：？うそでしょ、真守」  
事態を呑み込めてきた里美、泣き叫ん  
で真守に飛びつく。

○聖霊病院・全景（夜）

○同・手術室前（夜）

手術中のランプが点いている。  
脇のベンチで一人うずくまる里美。  
里美の携帯が鳴る。



ノロノロと電話に出る里美。

里美「…はい」

森口の声「あ、高垣先生？すみません遅い時間」

○森口の自室マンション（夜）

シンプルな室内。

帰宅してきたばかりの森口、鞆を置いて上着を脱ぎながら電話をしている。

森口「実は明日、運動会について急遽会議が入りました。早朝からの招集だったんで、ちよつと電話を」

里美の声「（元気がない声）そうですか」

森口「先生？どうかしました？元気なさそうですけど」

○聖霊病院・手術室前（夜）

電話を耳に当てたまま声を押し殺して泣く里美。

森口の声「先生？もしかして泣いてます？何

があつたんです？」

里美「すみません明日は仕事…行けそうに…」

泣いて言葉にならない里美。

○森口の自室前（夜）

脱いでいた上着を着ながらドアを開けて飛び出してくる森口。  
足早にマンションの階段を下りる。  
メールが届き走りながらスマホを確認する。

森口「聖霊病院」

スマホをポケットに押し込み道路に出る。

○森口の自室マンション前道路（夜）

森口、道路に出て辺りを見回す。

森口「タクシー！」

車が来る様子はない。  
森口、全速力で走り出す。

○ 聖霊病院・手術室前（夜）

手術中のランプが消える。

医師が手術室から出てくる。

里美、気付いて医師に駆け寄る。

里美「先生」

医師「出血の割に傷は浅かったようで、命に

別状はありません。気付いたのが早かった

のも幸いでした」

里美、安堵の息を吐き深く一礼。

里美「ありがとうございます」

医師、手術室へ戻っていく。

里美、礼をしたまま床を見つめている。

○ 同・真守の病室（夜）

真守が眠っている。

左手首には包帯。

里美、ベッドサイドに座り真守を見つ

めている。

足音が聞こえ、ノックされる。

森口の声「先生、森口です」

里美、立ち上がったってドアを開ける。

○同・真守の病室前（夜）

森口が立っている。

里美、ドアを開け会釈すると部屋から出てくる。

森口「息子さんのご容態は」

里美「手術は無事終わって、今寝ているところですよ。命に別状はないと」

森口「そうですか」

森口、ベンチに座るよう案内する。

里美と並んで座る森口。

里美「わざわざ来てくださってありがとうございます。ございました」

森口「いえ、先生の様子がすごく心配だったので。ですから勝手に来てしまっただけです。

とりあえず、命に別状ないと聞けただけでも良かった」

里美、力なく笑顔を作るがまた涙がこぼれる。

里美「すみません、また！」

森口「いえ、お気になさらず。あ、じゃあ僕  
席を外しましょうか」

森口、席を立とうとする。

里美、森口の袖を強くつかむ。

里美「いえ！」

森口、驚いて里美を見る。

里美「すみません、しばらくでいいので、い  
てもらえますか？」

森口、優しい表情になり里美の隣に座  
り直す。

森口「僕でいいなら、そばにいますよ」

里美、森口の肩に額を付けて泣く。

森口、里美を優しく見つめている。

○里美の家・全景（朝）

タクシ―が正面に停まる。

里美が降りてくる。

タクシ―の中から森口が見ている。

里美、振り返って森口に礼をする。

森口「学校の方には僕から適当に説明しておきますから、先生は息子さんの傍にいてあげてくださいね」

里美「ありがとうございます」

里美、部屋に入っただけでいこうとする。

森口「先生」

里美、振り返る。

森口「あまり思いつめすぎないように」

里美「はい、ありがとうございます」

里美、笑顔を作り一礼する。

森口も笑顔になり車内へ引っ込む。

タクシ―が発する。

里美、それを見送って部屋へ入る。

○同・真守の部屋（朝）

キレイに片付いた部屋。

里美、箆笥から着替えを出す。

ふと部屋の隅に追いやられているランドセルに気付いて近付く。

ランドセルは泥だらけ、泥の足跡も付

いている。

里美、険しい表情になりランドセルを開ける。

中にはボロボロになったノートや教科書。どれも「死ね」や「きもい」などの悪口が乱暴に書き込まれている。脱ぎ捨てられていた、真守が昨日来ていたシャツを見つけた。広げるとその背中にも泥の足跡。

里美「どうしてこんな：」

チャイムが鳴る。

驚く里美。

机の上の時計は朝8時。

○同・玄関前（朝）

ランドセルを背負った田代哲也（10）が立っている。

里美、ドアを開けて哲也を見る。

里美「あら、田代くん」

哲也「おはようございます！真守くんは」

里美「真守はちよつと具合が悪くて……」

哲也、真剣な表情になる。

哲也「もしかして、自殺しようとした？」

里美、驚いて哲也を見る。

里美、哲也に顔を近づけ、小声で中に入るよう促す。

○同・玄関（朝）

里美、哲也の前に膝をつき目線を合わせる。

里美「真守のこと知ってるの？」

哲也「真守は生きてるの？」

里美「ええ。今は入院中。おばさんは着替え取りに帰ってきたとこだったの。ねえそれより、何か知ってることあるの？あるなら教えて」

哲也「おばさん、何も知らないの」

里美「何もって何？あの泥だらけのランドセルのこと？酷い落書きばかりのノートのこと？」



里美、感情的に哲也の肩を揺さぶる。

哲也「い、痛いよおばさん」

里美「あ、ごめんなさい：」

里美、我に返り哲也から手を放す。

里美、深く深呼吸をしてから再び哲也に顔を向ける。

里美「真守は学校でいじめられているの？」

哲也、小さくうなずく。

哲也「僕、隣のクラスだから詳しいことまで

はわからないけど、5月くらいだったかな。

それくらいから真守がよくケガするようにな

っていた」

里美、茫然と哲也の話聞く。

○（回想）真守の通う小学校・廊下

腕にいくつも絆創膏を貼っている真守。

哲也に笑顔で「大丈夫」と言っている。

哲也の声「何聞いても大丈夫って答えるだけで」

○（回想）同・真守のクラス前

教室の中から怒鳴り声が聞こえる。  
哲也が隣の教室から出てくる。  
そつとドアの隙間から教室を覗く。  
真守を4人組のいじめっ子たちが殴る蹴るの暴行を加えているのが見える。  
哲也の声「でも、放課後に隣のクラスから怒鳴り声とか聞こえて見に行ったら真守が蹴られてたこととかもあって」

○（回想）同・真守のクラス内

哲也が飛び込んでいくといじめっ子たちは散り散りに逃げていく。  
哲也、真守を助け起こす。  
哲也の声「助けられるときは助けてたけど、そしたら僕にばれないようにやるようになっただけっぽかった」

ボロボロの真守、哲也に微笑む。

○もとの里美の家・玄関（朝）

里美、哲也に目線を合わせて話を聞いている。

里美「先生には？」

哲也「言おうとしたよ。でも、真守がやめてって。先生は大変なんだからって」

里美、うつむく。

哲也「僕、おばさんには言った方がいいって言ったんだ。いつもの真守見てたら、あんなランドセルとか見たら何か変だって絶対気付いてるはずだから」

里美、力なく首を横に振る。

哲也「きつと心配してるから言った方がいいよって。でも真守、いっつも大丈夫って…。絶対大丈夫じゃないのに」

○（回想）下校途中の道（夕）

哲也と真守（泥だらけのランドセル）が並んで歩いている。

真守、虚ろな表情。

哲也の声「昨日の帰り、何か決心したって感

じの顔してたからちよつと嫌な予感してた  
んだけど」

○もとの里美の家・玄関（朝）

哲也、悲しそうにうつむく。

哲也「まさか本当に自殺しようとしちゃうな  
んて」

里美、うつむいたまま。

里美「：違うわ」

哲也、顔を上げ不思議そうに里美を見  
る。

里美「あの子は昨日、食事の席で全部言おう  
と思つてたんだ。なのに私が約束をすつぽ  
かしちやつたから、あの子：」

里美の手が哲也の肩から滑り落ちる。

哲也、心配そうに里美を見ている。

里美「何も、何もあの子のこと気付いてあげ  
られなかった！ずっと一緒にいたはずなの  
に、なにも！」

里美、耐えきれず泣き伏せる。

○ 聖靈病院・全景

○ 同・真守の病室前

「高垣真守」と書かれた札がかかっている。

里美、部屋の前で少しためらうが意を決してノックして部屋に入る。

○ 同・真守の病室

真守がベッドで眠っている。

里美、そっと近付き真守の顔を覗き込む。

穏やかに眠っている真守。

左手首には包帯。

真守、少し唸ってそっと目を開く。

里美「真守：」

真守、覗き込んでいる里美へ視線を向ける。

真守「母さん：」

里美「真守、気分はどう？どこか苦しいとか、痛いとか、ない？」

真守、ボーっとした様子。

左手を動かさそうとして痛みを感じ、巻かれた包帯を見て目を見開く。

真守「そうだ、ぼくは」

里美、真守の右手を握る。

里美「真守、ごめんね」

真守、里美を見る。

真守「どうしたの急に」

里美「田代くんから聞いた」

真守、うつむく。

真守「…そっか」

里美「ダメね、誰かから教えてもらわなきゃこんな大変なことに気付けなかったなんて」

里美、涙を堪える。

里美「気付けなくてごめんね」

真守「仕方ないよ。母さんは仕事、忙しいもんね」

真守、里美を見ない。  
里美、真守を見つめる。

里美「真守」

真守、里美に背中を向ける。

真守「帰りなよ、今日も学校あるでしょ。ぼ

くは大丈夫だから」

里美「何言ってるの。あなたがこんな状態な

のに仕事に行けるわけないじゃない」

真守「今更母親ぶったこと言わないでよ！」

真守、声を荒らげながら起き上がる。

左手首の痛みにうずくまる。

里美が触れようとすると手を払う。

里美「真守」

真守「結局母さんが気付いたのはぼくが全部

耐えられなくなっただけじゃないか。それ

まで何も、なんにも気付いてくれなかつ

た！」

真守、涙を溜めて顔を上げる。

里美を睨みつける。

真守「母さんは何もぼくのことを見てくれて

なかった。外にいることばっかり  
気にして、家にいるぼくのことなんかいつ  
つも置き去りで」

里美、何も言えずただ真守を見る。

真守「お仕事なんだから我慢しなくちゃって  
思ってたけど：ぼくは、いつもひとりぼっ  
ちだった！」

真守の目から涙が零れる。

真守「学校でも家でもずっとひとりだった」

里美「真守っ」

里美、真守を抱きしめる。

里美「ごめんね、ごめんね。母さんが間違っ  
てた。本当は仕事よりもあなたの方が大事  
だってわかってたのに、あなたに甘えてし  
まってた。あなたとの生活のために働いて  
たはずなのに、いつの間にか、一番大事な  
あなたとの生活をないがしろにしてしまっ  
てたのね」

真守、泣いている。

真守「母さんのばかあ：大嫌いだあ」



里美「真守、あなたが大好きよ。さみしい思  
いばかりさせて本当にごめんね、大好きよ」

真守、泣きながら里美の背中に腕を回  
す。

里美、真守を強く抱きしめて泣く。

里美と真守、互いに抱き合って泣いて  
いる。

○ 私立 吾妻高校・全景

電話が鳴っている。

○ 同・職員室

室内には森口一人。

パソコンでテスト作成作業に没頭して  
いる。

電話を無視しているが耐えきれず、イ  
ライラを隠さずに電話を取る。

森口「はい、吾妻高校。ああ、高垣先生」

森口、優しい表情になる。

森口「どうかしたんですか。息子さんは」

椅子に深く座り、パソコンを閉じて電  
話に集中する森口。

○同・2年5組教室前

チャイムが鳴る。

「2年5組」の教室の札。

帰り支度をした生徒たちが教室から出  
てくる。

○同・2年5組教室内

教壇で晴子が教材を片付けている。

生徒たちが教室を出ていく。

生徒「先生さようならー」

晴子「はいさようなら」

久納が教壇に近付く。

久納「あの、先生」

晴子「はい？」

久納「えっと、高垣先生は？」

晴子「何かご家庭の用事だとかでお休みだそ  
うですよ」

久納 「そうですか：」

晴子 「何か質問ですか？」

久納 「いえ、いいです」

久納、あからさまにガツカリした様子で教壇から離れる。

晴子、不思議そうに久納を見る。

○同・職員室前の廊下

鞆を抱え、つまらなそうに歩いている

久納。

職員室に通るかか。

森口の声 「良かったですね、高垣先生：」

森口の声で足を止める久納。

職員室を覗き込むと電話で話している

森口の背中が見える。

久納、気付かれないようにそっと室内に入る。

○同・職員室

森口、電話で話している。

久納、そつと近付き、会話に耳をすま  
す。

森口「じゃあ息子さんとの仲は元通りという  
ことですか」

里美の声「ええ、まあまだぎこちないですけ  
ど」

○聖霊病院・真守の病室前

里美、ベンチに座り携帯電話で話して  
いる。

里美「この入院を機に取り返していきたくないな  
って思ってるんです」

森口の声「それがいいです。なんてったって  
こどもには母親が一番ですから」

里美「私の場合は父親も兼務ですけどね」  
森口の声「じゃあ猶更仲良くしなきゃ」

里美「そうですね。ああ、それで本題なんで  
すけど」

○私立吾妻高校・職員室

森口が電話している。

その陰で盗み聞きをしている久納。

森口「：はあ、休職ということですか。ちよ  
つと待ってくださいね」

森口、机の上の棚からファイルを取っ  
て書類を探す。

久納の表情が強張る。

森口「あ、あったあった。えーと休職の場合  
は休職届を出すように決まっていますね。え  
え、職員室に書類が。なので一度明日は登  
校していただいて」

久納、職員室を飛び出す。

物音に気付き入口を振り返る森口。

森口「あれは：」

里美の声「先生？」

森口「あ、すみません。それですわね：」

森口、電話に戻る。

○同・生徒玄関

久納、走ってくる。

息を切らし、下駄箱に寄りかかりながら休む。

帰り支度をした深山が通りかかる。

深山「久納くん。今帰り？」

久納、大げさに驚いて振り返ると、上履きのまま走って出ていく。

深山「変な奴」

深山、首を傾げる。

久納、よろけながら走っていく。

### ○通学路

下校している生徒が数人歩いている中、

久納が走ってくる。

久納、足がもつれて倒れこむ。

驚いて振り向く生徒もいるが誰も構わ

ない。

久納、ゆっくりと起き上がる。

土が付いて汚れて、表情のない顔。

久納「先生……」

久納の両手がゆっくり握り締められる。

日が落ちてきている。

○ 聖霊病院・真守の病室

夕日が病室を照らしている。

真守、ベッドに起き上がって窓の外を見ている。

缶ジュースを二本持って里美が入ってくる。

里美「お待たせ、買ってきたよ」

真守「ありがとう」

里美、ベッドサイドに座ってジュースを一本真守に手渡す。

真守、受け取る。

真守「ぼく、いつ退院できるの」

里美「もうすぐよ。明日か明後日には」

真守「そっか」

真守、缶を開けて一口飲む。  
里美も続いて一口飲む。

里美「お母さんね、しばらくお仕事休むことにしたわ」

真守 「えっ」

里美 「お母さんにとって一番大切なのはあなたが元気でいてくれることだもの。今まで一緒にいられなかった分を返させて？」

里美 、真守の手をそつと握る。

里美 「あなたを傷つけた罪滅ぼしをさせて。

真守が元気に学校に通えるようにお母さんも協力するから」

真守 、うつむき小さくうなずく。

里美 、真守の頭を抱き寄せる。

真守 「運動会、出たいな」

里美 「そうね」

真守 「リレー、押し付けられたけど、本当は嫌じゃないんだ。頑張りたいんだ」

里美 「うん。お母さんも応援に行きたいな」  
真守 、嬉しそうに里美に抱き着く。

○私立吾妻高校・全景（朝）

チャイムが鳴っている。



○同・職員室（朝）

里美が入ってくる。

里美「おはようございます」

晴子が寄ってくる。

晴子「高垣先生、おはようございます」

里美「おはようございます。昨日はありがと

うございました。急なピンチヒッターで」

晴子「いえ、それは全然。息子さん、体調崩

されたんですって？」

里美「ええ、まあちよつと数日入院に」

晴子「あら：」

晴子、周囲を見回し里美に顔を寄せる。

晴子「ところで、先生のクラスのあの子」

里美「あの子？」

晴子「不登校だったっていう子」

里美「ああ、久納くんですか」

晴子「わざわざ先生がいない理由を聞きに来

たんですよ」

里美「そうなんですか？」

晴子「よっぽど先生がいないのが淋しいんで

しょうね。表情も暗かったし」

里美「休むような人間に見えないから気にな  
っただけじゃないですか」

晴子「そんな感じには思えなかったですけど  
：ちよつと変わった感じの子ですね、あの  
子。妙に思いつめた感じっていうか」

里美「久納くんが」

里美、考え込む。

森口が入ってくる。

森口「おはようございます」

晴子「おはようございます」

里美、反応がない。

森口「先生？」

里美、ハツとして顔を上げる。

里美「あ、おはようございます」

森口「何か考え事ですか」

里美「いえ、ちよつと」

職員室入口に生徒がやってくる。

生徒「鈴掛先生！」

晴子「はい」

晴子、生徒の元へ走っていく。

森口、机の上に置いてあった書類を里

美に渡す。

森口「これ。休職の手続きに必要な書類」

里美「あ、ありがとうございます。用意して

くれたんですか」

森口「たまたま暇してたんで」

里美「助かります」

森口「権藤先生には軽く話しておいたんで、

多分スムーズに進むと思いますよ」

里美「何から何まで：本当にありがとうございます

います」

森口「いえ。乗り掛かった舟ですから」

森口、微笑む。

里美も微笑み返す。

○同・廊下

ヨロヨロと歩いている久納。

○同・職員室前の廊下

始業のチャイムが鳴る。

久納、職員室前まで来て、ドアから中を見る。

里美が森口と話している。

久納、笑顔になり職員室に入ろうとする。

職員室から権藤が出てきて久納とぶつかる。

権藤「こら、もう始業だぞ。教室に戻りなさい」

権藤、そのまま久納を押して教室へ促す。

久納、職員室を気にしながらも仕方なく教室へ向かう。

### ○同・職員室

里美、振り返って入口を見る。

授業の用意をしていた森口、里美を見る。

森口「どうしました？」

里美「あ、いえ」

里美「ちよつと考えて立ち上がる。

里美「私ちよつと教室に行ってきました」

森口「え？でももう鈴掛先生に代打お願いしているのでは？」

里美「そうなんですけど、やっぱりちよつと気になって：」

職員室を出ていこうとする里美。

森口「今行ったら帰れなくなりますよ」

里美、足を止める。

森口「息子さんと向き合うつて決めたんでし

よう？先生の仕事ぶりは立派ですが、優先順位を間違えちゃいけません」

里美「そう、ですネ：」

里美、踵を返し席に戻る。

森口「クラスのことなら、鈴掛先生も僕もちやんと見ますから。先生の留守はしつかり守ります。安心してください」

里美「：はい」

晴子、2年5組の出席簿を持って里美

の元へやってくる。

晴子「じゃあ行ってきますね」

里美「先生、よろしくお願いします」

晴子「ええ。同じ息子持ち同士、協力し合い

ましよう」

晴子、微笑み職員室を出ていく。

森口も出席簿を持ち立ち上がる。

森口「それじゃ僕も教室に」

里美「あ、はい。いってらっしゃい」

森口、微笑んで職員室を出ていく。

里美、それを見送ると机に向かい書類

を書き始める。

○同・2年5組

晴子が教壇に立っている。

生徒たちから里美のことを聞く声が

口々に上がっている。

松井「先生、高垣先生はー？」

美歩「今日もお休みなんですかー？」

玲花「病気とか？」

晴子「高垣先生はご家庭の事情でしばらくお休みになるそうです」

生徒から不満そうな声。

晴子「それじゃ皆さん、出席取りますよ」

晴子が名簿の名前を読み上げる。

久納、膝に手をついてうつむいて座つてピクリとも動かない。

晴子「久納くん。久納くん？」

反応しない久納。

隣の席の深山、久納を見て肩をつつく。

深山「久納くん。呼ばれてるぞ」

晴子「久納くん。いないんですか」

深山「久納くん」

ハッと気付いて顔を上げる久納。

久納「は、はい」

晴子「はい。いるならちゃんとお返事してく

ださいね」

晴子、出席簿にチェックを入れる。

久納、教壇を見つめブツブツと何か呟いている。

深山、久納を不審そうに見ている。

○ 里美の家・全景

タクシーが前に停まる。

中から真守、里美が降りてくる。

真守、駆け足で玄関へ向かう。

里美、荷物を持って後を追う。

○ 同・玄関

鍵を開けて扉を開く真守。

靴を乱暴に脱いで中に入っていく。

里美、入ってきて靴を直す。

里美「こら真守！靴ちゃんと揃えなさい」

真守の声「ねえ、チョコ食べていい？」

里美「いいけどその前に手洗って」

里美、靴を脱いで上がってくる。

○ 同・リビング

テレビを点け、ソファでチョコを食べ

ながら漫画を読んでいる真守。



里美、真守の洗濯物を畳んでいる。

里美「真守」

真守「んー？」

里美「学校、行きたい？」

真守「わかんない」

里美「明日、お母さん学校でお話ししてこよ

うと思うんだけど」

真守「何を話すの」

里美「田代くんから聞いたこと。担任の先生

は知らないんでしょ？このままは良くない

わ。きちんと先生に話して対応してもらわ

なくちゃ」

真守「先生に言うなんて」

里美「もう大人同士の問題で済まないの。今

まで気付けなかったお母さんが言うのもナ

ンだけど、ここまで深刻になってしまった

以上大人が何とかするべきなのよ」

真守「でも、先生に迷惑かかっちゃう」

里美「何を言ってるの。教師が生徒のために

動くのは当然のことよ。お母さんを見てた

でしょ？」

真守「だからだよ。ぼくのことです仕事増やし  
ちゃったから先生の時間をたくさん奪っちゃ  
うことになるから」

里美、返答に詰まってしまう。

真守「先生のところ、最近赤ちゃん産まれたん  
だって。ぼくたちにも写真見せて自慢して  
くるんだ」

里美「真守」

里美、真守の前に膝をつき真守の目を  
ジッと見る。

里美「大丈夫よ。お母さんと違って、きっと  
上手に対応してくれるから。先生を信じて、  
相談しよう」

真守、里美を見つめている。

里美、微笑んでみせる。

○真守の通う小学校・全景（朝）

○同・正面玄関（朝）

里美と真守がやってくる。  
真守、まだ迷っている様子。  
里美、真守の手を引いて玄関へ。

○同・応接室（朝）

里美と真守、正面に真守の担任の三浦良一（33）と戸田校長が座って話している。  
テーブルには落書きされたノートや教科書、泥の跡が付いたシャツが広げられている。  
真剣な表情で訴える里美。  
三浦、真剣に話を聞いている。  
戸田校長は困ったような表情。  
真守、うつむいている。

○私立吾妻高校・2年5組教室

晴子が授業をしている。  
真面目に授業を受ける生徒たち。  
久納、シャーペンを握ったままうつむ

いている。  
深山、チラリと久納を見る。

○真守の通う小学校・廊下

哲也が友達と遊んでいる。

応接室から里美と真守が出てきたのを

見つけ、駆け寄ってくる。

三浦も出てくる。

三浦、哲也に話しかける。

哲也、真剣に話し始める。

里美、真守の肩を抱いて様子を見てい

る。

廊下の奥で高田純也（ヒロ）とクラスメイ

トA、B、Cの4人組のいじめっ子た

ちが様子をうかがっている。

里美、彼らに気付き顔を上げる。

純也たち、慌てて逃げ出す。

三浦、純也たちに気付いて追いかける。

里美、真守の肩を強く抱き寄せて見守  
る。

哲也、里美と真守に近付く。

哲也「大丈夫？真守」

真守「うん：」

三浦が純也を捕まえて話をしている。

哲也「きつと先生ならなんとかかしてくれるよ」

真守、三浦と純也のやり取りを見つめて  
ている。

真守、三浦と純也の元へ歩き出す。

里美「真守」

真守、三浦と純也と話し始める。

里美、哲也と様子を見つめている。

純也、真守に頭を下げる。

真守と純也、握手する。

里美、その様子に安堵の笑みを浮かべる。

○私立吾妻高校・2年5組教室

休み時間。

生徒たちがそれぞれ談笑したりして過  
ごしている。

深山の席に松井や岡倉が遊びに来てい  
る。  
深山、うつむいて座っている久納に声  
をかける。  
久納、怯えた様子で深山を見て、逃げ  
るように教室から出ていく。  
深山、心配そうに見ている。  
松井と岡倉、不機嫌に見ている。

○同・男子トイレ

個室の中、頭を抱えて座っている久納。  
ポケットからクシャクシャになった里  
美からの手紙を取り出す。  
久納、手紙を見て泣き出す。

○里美の家・リビング

お菓子を食べながらテレビを見ている  
里美と真守。  
部屋の隅にはキレイになったランドセ  
ルと新しいシャツ。

談笑する里美と真守。

○私立吾妻高校・2年5組教室

森口が授業している。

森口、話しながら久納を見る。

久納、机の上に教科書やノートを広げ

ているが手は膝の上。

顔を上げていているが、生気は無くボーッ

としている様子。

森口、授業を続ける。

○同・書庫

入口に「書庫」の札。

森口、たくさん並んだ棚の中から探  
し物をしている。

手にしたメモ用紙には「令和3年度

1年2組」と書いてある。

森口、棚から1年2組の出欠名簿を取

り出し開く。

久納の名前を見つけ、出席状況を指で

なぞる。二学期から欠席が続いている。

森口、担任を確認する。

権藤進の文字。

森口「権藤先生だったんだ」

権藤が入ってくる。

権藤、森口を見て笑顔で会釈する。

権藤「ああ、森口先生。いたんですか」

森口「あ、はい」

権藤、棚から書類を探し始める。

森口「権藤先生。先生、去年は久納くんの担

任だったんですね」

権藤「久納くん？ああ、高垣先生のクラスの、

あの子のことですか」

森口「そうです、不登校だった」

権藤「担任でしたよ。とはいっても、あまり

登校してくれてないですけど」

森口「去年は一学期だけ登校して、後はずっ

と欠席だったんですね」

権藤「ええ。恥ずかしながら、私は高垣先生

のように一人の生徒にあそこまで熱心で



きなかつたので、去年は殆ど登校してくれていませんね」

森口「彼、どうして来なくなってしまったんですか」

権藤「さあ：」

森口「いじめとか、そういうのは」

権藤「内々に調査しましたけど見つけれませんでした」

森口「そうですか」

権藤「去年見ていると、まあとにかく繊細な子だなって印象でしたよ。ちよつとしたこととですぐ傷つくというか。一度私が寝癖を指摘したことがあったんですけど、次の日欠席してました。次に来たときは妙に髪がぴっちり整ってましたね。あ、あまり注意してはいけないう子なんだなと思いましたよ。それから妙に私におびえた様子もあつたり。何もしてないのに、ですよ？あれはさすがに私が傷つきましたねえ」

森口、考え込んでいる。

権藤「でもどうしたんです？そんなこと聞いて。彼は登校しているんでしょ？」

森口「そうなんです。が、やっぱり彼の様子がおかしくて。授業中も心ここにあらずといつか。なんとなく気になってしまっただけ」

権藤「はあ。まあ、来ているんならそれでいいんじゃないですか？」

森口「そうでしょうか」

権藤「彼はあなたのクラスじゃないでしょう。あまり気にせず、自分のクラスの生徒を気にかけてあげてください」

権藤、ファイルを棚から取ると去っていく。

森口、納得がいかない表情。

森口「僕のクラスじゃないですけど、生徒は生徒ですよ」

ドアが閉じられる。

### ○ 同・職員室

森口が入ってくる。

権藤の笑い声が聞こえる。

権藤の席に久納が来て話している。

権藤、久納にメモ用紙を渡す。

久納、小さく頭を下げると足早に職員

室を出ていく。

途中森口とすれ違う。

森口、久納を見送って権藤の席へ向か

う。

森口「久納くん、珍しいですね」

権藤「高垣先生の様子を聞きに来たんですよ。

お休みって病気か何かかって。だから説明

してあげたんです」

権藤、満足そうに笑ってみせる。

権藤「それから、先生に年賀状を送りたいか

らと言うから住所を」

森口「え、教えたんですか」

権藤「なにか問題が？」

森口「先生、個人情報ですよ」

権藤「大丈夫でしょう。生徒ですよ？」

森口「でも最近の彼、ちよつと様子が」

権藤 「気にしすぎですって」

森口 「でも」

権藤 「はいはい、このお話はおしまい。先生、次の授業の準備は大丈夫ですか」

権藤 、森口を手で払う。

森口 、何か言いたそうな表情で席へ戻っていく。

席に戻った森口 、名簿を出して電話をかける。

○里美の家・リビング

テレビでバラエティが流れている。

ソファに座る里美に寄りかかって真守が寝ている。

里美 、優しく真守の頭を撫でながら眺めている。

里美の携帯がマナーモードで揺れる。  
里美 、携帯を取り画面を確認。

「吾妻高校」と出ている。

里美 、眠る真守をチラリと見る。

里美「：ごめんなさい」

里美、電話を切る。

○私立吾妻高校・職員室

森口、電話に出るのを待っている。

電話が切れる音。

森口「あつ：切れた」

受話器を戻す。

里美の席を見る。

森口「思い過ごしならいいんだけど」

チャイムが鳴る。

森口、慌てて授業の用意を持って出ていく。

○同・男子トイレ

久納、個室に座り、手にしたメモ用紙を開く。

久納「先生」

久納、メモ用紙を強く握り締める。

○スーパー・全景（夕）

主婦で賑わっているスーパー。

○同・店内（夕）

里美、真守と一緒にメモ用紙を見ながら食材を籠に放り込んでいく。

真守が卵の特売を里美に教える。

真守「お一人様1パックだって」

里美「二人で来て正解だったね」

里美と真守、笑いあう。

○帰り道（夕）

里美と真守、エコバッグいっぱい食材を持って歩いている。

里美「帰ったらすぐ作るね」

真守「手伝おうか」

里美「あなたは勉強なさい。明日、学校行くんでしょ」

真守「（不満げに）はい」

里美、真守を優しく眺めている。

真守「あれ、誰かいる」

里美、顔を前方に向ける。

○里美の家の前（夕）

入口の門のところに久納が寄りかかっている。

逆光になっていて里美からは誰かわからない。バットを持っている。

○帰り道（夕）

里美、目を細めて注視する。

○里美の家の前（夕）

久納が起き上がり里美の方を向く。

里美からも久納だとわかる。

久納、無表情。

○帰り道（夕）

里美、あっと驚いた表情。

里美「久納くん」

真守「母さん、知り合い？」

里美「うん」

里美、笑顔で久納に駆け寄る。

真守もついていく。

○里美の家の前（夕）

里美、久納の前で立ち止まる。

里美「こんにちは、久納くん。どうしてここ

に？私の家、よくわかったね」

久納、里美を無表情で見つめる。

何も言わない。

里美、恐る恐る話しかける。

里美「久納くん？」

久納、無言のままバットを頭上で構える。

里美、バットを見て後ずさる。

里美「ちよつと久納くん、なんのつもり」

久納、突然バットを降り下ろす。

里美、咄嗟に逃げて尻もちをつく。

バットは里美の肩をかすめて地面に叩



きつけられる。

真守 「母さん」

久納、真守を見る。

真守、里美に駆け寄ろうとするが久納

と目が合い固まってしまふ。

里美、真守を見る。

里美 「真守」

久納、真守を睨みつけながらバットを

振り上げる。

里美 「だ、だめ！」

里美、必死で立ち上がり真守へ駆け寄

る。

久納、バットを降り下ろす。

里美、真守を抱きしめて転がる。

久納の降り下ろしたバットが地面を叩

く。

久納、再びバットを構える。

里美、真守を後ろ手に庇い久納を見る。

ゆっくりと里美に近づく久納。

久納 「先生、どいて」

里美「なんでこんなことするの久納くん」

久納「どかないと、先生を殴るよ」

里美「どかない！」

里美、真守を強く抱きしめる。

久納「なんでそいつを護るの。先生は僕を護  
ってくれるんでしよう」

里美「私が護るのはこの子だけよ。私の息子。

真守「だけよ！」

久納、目を見開き泣きそうな表情。

バットを振り上げたまま里美を見下ろ  
している。

久納「…どうして」

久納、バットを強く握る。

里美、久納を睨みつける。

久納、険しい表情に変わる。

久納「裏切者！」

バットが降り下ろされる。

里美と真守、ギョツと目を瞑る。

バットは里美の頭すれすれで止まる。

里美、恐る恐る目を開く。

久納の泣き声が聞こえる。

里美、久納を振り返る。

久納「なんで、先生。なんで学校に来てくれないの」

久納、バットから手を放す。

バットが地面に転がる。

里美、真守を抱きしめたまま久納を見上げています。

久納「先生、言ってくれた。いつでも護ってあげるって。僕の味方だって、言ってくれたよね」

里美「ええ……。でもそれは」

久納「だったら学校に来てよ！僕を護ってよ。先生がいない学校は怖いんだ、不安でたまらないんだ、先生が守ってくれなきゃ学校になんか行けない」

里美「久納くん：」

久納、泣きじゃくる。

久納「先生、明日から学校に来てよ。僕と一緒に学校に行こうよ。僕の味方なんですしよ

う？いつでも護ってくれるって言ったじゃないか。僕、先生がいてくれるから頑張れるんだよ」

久納、膝をつき里美にすがる。

久納「家まで来てくれたじゃん。たくさん通って来てくれたじゃん。一緒に学校行こうって。なのにどうして？どうして先生は学校を休んじやうの。僕が学校に行ったらそれでおしまいなの。全部嘘だったの？先生」

里美、何も言えず目を逸らす。

久納「ねえ、先生」

真守「やめろよ！」

真守、里美から引き離すように久納に飛びかかる。

もんどり打って倒れる久納と真守。

真守、久納に殴りかかる。

久納、必死で応戦する。

真守「母さんは俺の母さんだぞ。あんたのお母さんじゃない！高校生のクセに甘えてんじやねえよ！」

久納「なんだと！ガキのくせに、わかったよ  
うなこと言うな！」

真守「一人で学校も行けないような奴の方が  
ガキじゃんか！」

久納「僕の気持ち知らないくせに！お前みた  
いな幸せしか知らないで偉そうなこと言う  
奴が、僕は一番嫌いなんだ！」

殴り合いの喧嘩をする久納と真守。

里美、オロオロと見ている。

意を決して二人に近づく。

里美「やめなさい二人とも」

真守「俺だってお前みたいな甘ったれ嫌い

だ！逃げんな！」

久納「このクソガキっ」

里美「やめなさい！」

久納、真守に殴りかかる。

里美、久納の手首をつかむ。

里美「やめて久納くん」

久納、里美を睨む。

久納「離せよ」

里美「ケンカはダメよ」

久納「離せよ、あんたも嫌いだ。もうあんたの言うことは聞かない。あんたは嘘ばっかりだ」

里美「そうね。結局私が言ったことは嘘になっ  
てしまった。私が間違ってた、ごめんなさい」

里美を睨み続ける久納。

里美「私は教師として完璧に務めようとばかりして  
いた。不登校だったあなたのケアもそう。全員が揃って色  
々な行事に取り組む完璧なクラスの担任であること。そ  
れが私にとって重要なことだったの。だから熱心に  
あなた元へ通った。自分の生活を犠牲にしてね。でも  
それは間違いだった」

里美、真守を見る。

里美「仕事に夢中になるばかりに、自分の子供の  
ことをないがしろにしていた。あの子が傷ついて  
苦しんでいるのに、普通の親なら気付くであろう  
サインにも気付かなか

った。今度は自分の子供が学校に行けない  
どころか、命を絶とうとしてしまった」

久納、真守を見る。

真守、うつむく。

里美「結局私は、自分のことが好きなかっただけだ  
ったのよ。教師として頑張っている自分が  
好きだっただけ。何もわかってなかった。  
結果的に周りを苦しめただけだった。私が  
やってきたことは自己満足で：ただの偽善  
だったわ」

里美、久納の手を握る。

里美「ごめんね久納くん。期待させるだけさ  
せといて、裏切って、あなたのことまでこ  
んなに追いつめて：。教師失格だね、私」

里美、涙を流す。

久納、里美を見つめる。

久納「先生」

里美、声を殺して泣いている。

里美の手を握り返す。

久納「先生、泣かないで。僕も悪かった。あ

んなに熱心で優しくしてくれたの、先生が初めてで嬉しくて、甘えすぎた。(真守を見つつ)この子の言うとおりで、甘ったれのガキだったね」

里美、泣きながら首を横に振る。

久納「先生。先生からしたら偽善だったのかもしれない。でも、その偽善はあの時確かに、僕を救ってくれたよ」

○(回想)久納の家・久納の部屋(夜)

無表情の久納。

薫から手紙とプリント受け取る。

封筒を開け中の便箋を取り出す。

読むうち久納の表情が明るくなる。

手紙の最後には「先生はいつでもあなたの味方です！」とある。

○もとの里美の家の前(夕)

久納、手紙を里美に見せる。

久納「ありがとう。先生に感謝してるよ」



里美「久納くん」

久納「怖い思いさせてごめんなさい。すぐ暴

走するのが僕の悪いクセなんだ」

久納、真守を見て頭を下げる。

久納「殴ってごめんなさい」

真守、慌てて頭を下げる。

真守「あ、えとぼくも：ごめんなさい」

真守を見て里美と久納、微笑む。

里美「久納くん。私、学校ではちゃんと今ま

で通りあなたの味方だし、助けられる限り

助ける。けど、一番大切なのはやっぱり、

この子だから」

久納「うん、家族が一番大事なのは当然」

久納、淋し気な表情でうつむく。

久納「先生が：僕のお母さんなら良かったの

にね」

里美、久納を見つめる。

薫の声「怜人！」

驚いて振り返る久納、里美、真守。

走ってきて息を切らしている薫と、そ

の後ろに森口が立っている。

久納「母さん、なんで」

立ち上がる久納。

薫が久納に駆け寄る。

薫「学校であんたの様子がおかしかったって

連絡もらったんだよ。何があったの、大丈夫

夫？ああこんなところに傷が」

薫、久納の顔や体を擦る。

森口、里美の元へ近付く。

里美「森口先生、これは」

森口「先生に連絡つかなくて気になったので

念のため来てみたんです。里美と真守の様

子を見て、どうやら正解だったみたいですよ

ね」

里美「あ、いえこれは」

久納「は、放せよ母さん。大丈夫だからこれ

くらい」

久納、薫の手を掴んで離す。

薫、心配そうに久納を見ている。

里美「素敵なお母さんじゃない。あなたを心

配してこうして飛んできてくれるんだ

よ？」

久納「先生」

里美「お母さんは、私よりもずっとあなたを見て、あなたを心配して思ってくれてる。ずっと傍にいた、あなたが一番よくわかってるはずでしょう？」

久納、小さくうなづく。

薫「あの、怜人が何か」

真守、立ち上がって間に入る。

真守「僕と遊んでて、ちよつとケンカになっちゃっただけです！（久納に）ごめんね、お兄ちゃん」

薫、真守を見て目を丸くする。

久納「あ、うんこつちこそごめん」

里美「さ、お母さんも来てくださったんだし、今日はもう帰りなさい。うちの子の相手してくれてありがとうね」

久納「はい」

久納、薫と帰ろうとするが立ち止まり

里美を振り返る。

久納「先生。僕、頑張ってみる。…だから、学校では見守ってくれるかな」

里美「もちろん」

真守「学校にいる時なら、ウチの母さん貸してやるよ」

里美、真守を小突く。

久納、それを見て笑う。

久納「ありがとう」

久納、一礼して薫と帰っていく。

真守、大きく手を振って見送る。

○里美の家・全景（朝）

青空が広がっている。

遠くの方で花火の音が聞こえる。

○同・キッチン（朝）

里美が料理をしている。

作業台の上には作りかけの弁当。

ゆで卵を茹でながら、チーズを花形に

切ろうと必死にナイフを動かしている  
里美。

大きい足音を立てて体操服の真守が入  
ってくる。

真守「お母さん、白い靴下どこ！」

ナイフがずれてチーズの花弁が切れて  
しまう。

里美「あー！ やっちゃった」

真守「お母さん靴下どこ」

里美、もう一枚チーズを出して再び切  
り始める。

里美「えー？ 箸筒は」

真守「ないから探してるんだよ」

里美「昨日の洗濯物畳んでないでしょあの中  
にあるんじゃないの」

真守「えー」

真守、リビングへ向かう。  
チーズが上手に花形になる。

里美「やった」

里美、満面の笑み。

○同・リビング

真守がトーストを食べながらテレビを  
見ている。

弁当箱を持った里美がスキップしながら  
入ってくる。

里美「真守、見て見て！じゃーん」

真守に弁当箱を差し出す。  
運動会をデザインしたデコ弁。

海苔で「ガンバレ！」とある。

真守「すごい！頑張ったじゃん」

里美、弁当を包んで真守に手渡す。

真守、ランドセルに入れる。

里美「でしょー？見に行けない分、ここに気  
持ちをたたくさん詰めたからね」

真守「これで頑張れるよ。ありがとう」

里美「でも本当にいいの？行かなくて」

真守「いいよ。お仕事だから仕方ないって言  
ったでしょ。今日は怜人くん見てあげてて

よ」

里美「あ、なまいき」

里美、笑って真守をツンと小突く。

チャイムが鳴る。

哲也の声「真守くん」

真守「あ、もう来た！」

真守、急いでランドセルを担ぐと

走ってリビングを出ていく。

○同・玄関前（朝）

体操服の哲也が待っている。

真守、出てくる。

真守「おはよう！」

哲也「おはよう。行こう！」

真守「うん！」

真守と哲也、並んで走っていく。

里美、玄関から顔を出し手を振る。

里美「いってらっしゃい、頑張っ  
てね！」

真守「はい！」

里美、大きく手を振って見送る。

○真守の通う小学校・全景  
賑やかな音楽が流れている。

○同・グラウンド

手作りの派手な「大運動会」の垂れ幕がかかっている。  
児童たちがかけっこや障害物競走、ダンスを披露している。

× × ×  
綱引きをしている真守。

真守のクラスが勝つ。

純也たちいじめっ子とも一緒に喜んで  
いる真守。

× × ×  
アナウンス「最後はクラス対抗リレーです。  
選手の方は入場門まで集まってください」

○同・入場門前

児童たちが並んでいる。  
真守も並んでいる。



真守の後ろに並んでいる児童AとBが話している。

児童A 「あ、ママみつけた」

児童B 「どこどこ？あ、あれがそう？」

児童A 「うん。パパも来てる！」

児童B 「いいなーうちはパパ仕事だからママ

だけだよ」

真守、うつむく。

里美の声「真守！」

真守、驚いて顔を上げる。

里美の声「真守、こっちこっち！」

振り返る真守。

フェンス越しに里美が手を振る。

真守「お母さん」

立ち上がる真守。

里美、微笑み親指を立てて見せる。

里美「今からリレーでしょ。しっかり応援す

るからね。頑張って！」

真守、ぽかんとしていたが次第に笑顔になって大きくなさく。

真守 「うん、見てて！」

里美、笑顔でうなずく。

○同・グラウンド

歓声の中、児童たちがバトンを持ってトラックを走っている。

○同・入場門前

フェンス越しに見ている里美。

隣に森口が立っている。

里美 「がんばれがんばれ！いいぞ〜！」

○同・グラウンド

真守、スタート地点に待機する。

赤いハチマキと真守のチームが先頭争いをしながら走ってくる。

赤いハチマキの児童がバトンを受け取る。

真守、そのすぐ後にバトンを受け取り走り出す。

○同・入場門前

里美、フェンスに乗り出して大声で叫ぶ。

里美「真守ー！ いけいけーっ！」

森口「危ないですよ先生！」

森口、慌てて里美を支える。

○同・グラウンド

真守、抜けそうに抜けない。

真守、必死。

○同・真守のクラス

児童たちが応援している。

純也たちも応援している。

純也「いけーっ！ 真守、ぶっ飛ばせー！」

○同・哲也のクラス。

哲也と児童たちが応援している。

哲也「がんばれ真守ー！」

○同・入場門前

森口に支えられながら里美が応援している。

○同・グラウンド

真守、必死で速度を上げる。  
赤いハチマキの児童を抜く。  
歓声が大きくなる。

○同・入場門前

里美、飛び跳ねている。

○同・真守のクラス

必死で応援している児童たち

○同・グラウンド

真守、1位でゴールテープを切る。  
ピストルが鳴る。  
いっそうあがる歓声。

真守、肩で息をしながら倒れこむ。  
満足そうな笑顔。

○同・真守のクラス

児童たち、大喜び。

純也「すげえ、あいつすげえよ！一位じゃん！

優勝だー！」

純也たち、大声で騒いで喜んでいる。

○同・入場門前

里美、飛び跳ねている。

里美「真守すごい！一等賞！すごいよおめ

でとう！」

森口「先生、行きますよ！もう時間がないで

すから！」

森口、先に立って歩き出す。

○真守の通う小学校傍の道路

森口の車が停まっている。

森口が運転席、里美が助手席に乗り込

む。

森口「さ、急いで学校に戻らないと。そろそろこっちもリレーが始まってしまおう」

里美「はい。ありがとうございます。先生。

わがままに付き合ってくれて」

森口「いいんですよ、大事な子供のためならちよつとくらいわがまま言ったって。できる範囲はフォローしますから」

里美「はい。頼りにしています」

森口、ニヤツと笑ってエンジンをかける。

○私立吾妻高校・グラウンド

「第53回吾妻高校体育祭」の垂れ幕がかかっている。

生徒たちの盛り上がる声。

○同・2年5組陣営

深山が立ち上がって皆を見回す。

深山「いよいよリレーだ！優勝するぞ！」

生徒たち「オー」と腕を上げる。  
リレー担当の松井、岡倉、女子生徒二人が前に出て手を振りながら歩いていく。

松井「見てろよ！」

岡倉「応援よろしくー」

久納、皆と一緒に拍手で見送る。

深山が久納の隣の席に戻ってきて久納と笑いあう。

○真守の通う小学校傍の道路

森口の車のエンジンがかかる。

森口、ハンドルを握る。

森口「それじゃ、全速力でいきますよ」

里美、笑顔でうなづく。

里美「お願いします」

○私立吾妻高校・グラウンド

選手たちがスタートに着いている。

権藤がスターターピストルを掲げる。

権藤「位置について：」  
選手たち構える。

○同・2年5組陣営

久納、深山と並んで見守っている。

○同・グラウンド

スターターピストルの音が響く。  
選手たちが走り出す。

○真守の通う小学校傍の道路

森口の車が走り出す。

了